

保育者養成校における学生による 「アウトサイダー・アート」の捉え方の分析

栗 本 浩 二・池 田 幸 代

Analysis of students' perception of Outsider Art in Nursery Teacher Training Junior College

KURIMOTO Kouji, IKEDA Yukiyo

キーワード：アウトサイダー・アート、子どもの
表現活動、保育者養成

I. 研究の背景と目的

1. アウトサイダー・アートとは何か

近年、いわゆる「アウトサイダー・アート (Outsider Art)」あるいは「アール・ブリュット (Art Brut)」(以下、この類のアートについてアウトサイダー・アートと統一して表記する。)への関心が高まりを見せている。「アウトサイダー・アート」は、現代の日本の教育・福祉的視点では「精神障害・知的障害をもつ人たちが制作した『芸術的な』作品¹⁾」と捉えられることが多い。美術分野でも、障害のある人が表現し、制作した造形作品は「アウトサイダー・アート」と称されることが一般的になりつつあり、「エイブルアート (Able - Art)」と提唱されたり、総称的に「障害者アート」と特定して呼ぶ場合もある²⁾。

しかし、そもそも「アウトサイダー・アート」とは、20世紀仏の画家ジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet 1901-1985) が、精神病患者の作品などに対して「アール・ブリュット (生^{き・なま}の芸術)」として、1945年頃より提唱し始めた概念である。それまでは「狂人の芸術」「精神病患者の芸術」などと呼ばれていた一連の作品群を「芸術的教養に毒されていない人々が製作した作品」として、より審美的かつ包括的に捉えるために用い

られた造語とされている³⁾。東野⁴⁾によれば、デュビュッフェはさらに詳細に、「芸術の教養で痛めつけられていない連中の作品のことである。かれらにあっては文化人の場合と反対に、真似事がどこにもない。かれらは主題、使う材料の選択、転置の方法、リズム、書法などすべてを自分自身の根底から引き出してくるのであって、古典芸術あるいは流行の芸術のパターンを借りていてのではない。ここに見られるのは、自分自身の衝動からのみはじめて、すべてがまったく再発明された、完全に純粹で生の芸術的行為である。つまり文明的芸術にいつも見られるカメレオンと猿の機能ではなく、発明という機能だけがあらわれた芸術である」と、その独自の芸術性を定義している。

そして、「アウトサイダー・アート」とは、この「アール・ブリュット」を英語訳し、1972年に英の美術史家ロジャー・カーディナル (Roger Cardinal, 1940-) が、自らの著書に冠したもので、概念の内容はほぼ同義と考えられる⁵⁾。

日本における、このような「アウトサイダー・アート」概念の始まりは、1993年に開催された「パラレル・ヴィジョン 20世紀美術とアウトサイダー・アート」展という展覧会であるという⁶⁾。この展覧会では、精神病患者、霊媒師、独居老人、主婦ら「アウトサイダー」34名の作品と、プロの芸術家すなわち「インサイダー」40名の作品をひとつの空間に展示した。この展覧会の主催者であるタックマン (Maurice Tuchman) は、「ア

ウトサイダー」を「正式な美術教育を受けることなく、ただ創作への衝動に駆られて作品を生み出す人たち、精神的な障害を持っていたり、人里離れた所で生活を送っていて、“文化”と接触のない人たち」と定義している⁷⁾。また、服部は「美術大学などで正規の美術教育を受けていない人が独学で制作した美術作品」と定義している⁸⁾。

上記を総合して考えると、「アウトサイダー・アート」とは「障害者アート」と狭義に捉えられるものではなく、「いわゆる芸術教育をうけていない、またはそのパターンや書法といった、ある種の制限や社会文化の影響を受けることなく、自分自身の創作に対する衝動にのみよりはじまり、他者による価値判断や評価を期待しない、自分特有の表現方法を用いた芸術的行為であり、またその作品」であると捉えることも可能だろう。

また、今日のインクルージョンやノーマライゼーションの観点からも、インサイド＝主流・正統派イメージに対極するものとしての、アウトサイド＝主流から外れたもの・非正統派、はては外部者や異端者（実際、日本で“放浪の画家”として有名な、八幡学園（知的障害児施設）の山下清を初めて世に知らしめた展覧会は『特異児童作品展』と称された）、としての名称や扱いは、不当なものとも言える。タックマン⁹⁾の言うように「インサイダーとアウトサイダーの作品は、それらがすべて芸術として等しく有効」だからである。

このように、アウトサイダー・アートの成り立ちを考慮すると、現代においてその名称の是非も検討課題となるが、その作者を精神障害者や知的障害者に限定することも狭義である。すなわち、上述の「ある種の制限や社会文化の影響を受けることなく、自分自身の創作に対する衝動にのみよりはじまる、自分特有の表現方法を用いた芸術的行為であり、またその作品」を創造する者として、他者から強制されることなく、また見せることも意識せず、自ら自由に造形表現を行う子どももアウトサイダーであると言える。

2. 保育における子どもの表現活動

幼稚園教育要領および保育所保育指針における、ねらい及び内容のうち、子どもの造形表現に関わる領域は、感性と表現に関する領域「表現」であると考えられる。その記述の中で、特に造形表現に該当すると思われる箇所を以下に抜粋する。

【幼稚園教育要領】

表現 「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。

(2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。

(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるような遊具や用具などを整え、自己表現を楽しめるように工夫すること。

【保育所保育指針】

表現 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

ねらい

(ア)

① いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。

② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

内容

(イ)

① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。

② 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。

③ 生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。

④ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

⑤ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。

⑥ いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。

⑦ かいたり、つくったりすることを楽しみ、

それを遊びに使ったり、飾ったりする。

これらをごく大まかにまとめると、幼稚園・保育所においては、子どもは様々な経験から豊かな感性を育み、そこから持つ心の動きや感動を、身近な素材で自由に表現しようとしたり、表現したりすることを楽しみ、保育者はその意欲を受け止めることが、表現活動の中心であるといえよう。保育者は、その表現方法を指導するという文言はどこにも見当たらない。すなわち、子どもにとっての造形表現とは、先述のデュビュッフェの「自分自身の衝動からのみはじめて、すべてがまったく再発明された、完全に純粹で生の芸術的行為である。」と捉えることが可能になる。

では、子どもにとっての“衝動”とはどのようなものであろうか。安東・圖子¹⁰⁾は子どもの砂遊びに着目して、「なぜ毎日飽きもせず砂遊びを繰り返すのか」「砂遊びの何が彼らを引き寄せているのか」といった「造形活動」を牽引し、諸々の出来事を引き寄せている「活動の根源」を衝動と呼んでいる。その活動の根源は、「砂遊び」を繰り返す子どもたちが「砂遊び」終了時に決まって発言する「とても面白かった」という〈生の充実〉であるという。それはまた、アール・ブリュット（生の芸術）の衝動と同質のものであることが予想される。ゆえに、保育の場において、子どもは美術教育を受ける以前のアウトサイダーとして、日々自らの内なる衝動からなるアウトサイダー・アートを楽しんでいると換言できるだろう。

3. 研究の目的

これまで論を進めてきたように、子どもの表現活動、特に保育の場における造形表現は、アウトサイダー・アートとしての意味合いが濃く、保育者がその衝動による自由な活動を、インサイドな見方から指導することは、制限ともなりかねない。ゆえに、保育者は偏りなくアウトサイドな視点も持つことが必要となることは自明である。それは、保育者を志望する学生においても同様である。しかし「1. アウトサイダー・アートとは何か」で述べたように、アウトサイダー・アートは「障害

者アート」と狭義に捉えられている実情もある。そこで本研究では、保育者養成校の学生を対象に、本来のアウトサイドからの視点を持たせる教育の一助とすることを目的に、学生が「アウトサイダー・アート」という表現をどのように捉えているか、その実情の調査・分析を行う。

Ⅱ. 調査

1. 手続き

2014年11月、T短期大学において著者の受講生に対して、講義中にアウトサイダー・アートの説明を行った。その後、アウトサイダー・アートを含む9点の絵画作品を例示した調査用紙を配布し、記入後回収した。調査の前に調査目的、調査協力者の回答への自由、回答中断の権利、個人情報の取り扱い等、調査倫理に関わる注意事項を口頭で説明を行った。また調査協力者への同意の確認は、質問紙への記入をもって同意とすることとした。

2. 調査対象

配布数104通のうち回収されたのは、計77通（回収率74.0%）の有効回答を得られ、分析対象とした。

3. 調査内容

- ① アウトサイダー・アートの認知度を探るために、「アウトサイダー・アート」という言葉を知っているかについて、「はい・いいえ」で回答を求めた。
- ② 9点の作品のうち、学生がアウトサイダー・アートをどのように捉えているかについて探るために、アウトサイダー・アートだと思う作品のナンバー3点の記入、およびその理由を自由記述するよう求めた。
- ③ ②同様、9点の作品のうち、アウトサイダー・アートか、いわゆる芸術作品かの区別無く、学生の芸術嗜好を探るために、好きな作品のナンバー3点の記入、およびその理由を

自由記述するよう求めた。

4. 分析方法

質問紙の回答を整理し、主な理由となるフレーズを抽出し、フレーズ毎に分類した。

その後、出現度数が高かったフレーズを得点化し、統計処理を行った。

5. 作品の選択理由

対象学生は、絵画に対して深く関心を持つ者が少なく、アウトサイダー・アートに関しての知識も少ないことを前提に、具象的絵画で特に描写力の高い作品、物語や心情が読み取れそうな作品、感情的な表出が感じられる作品、細かな作業の集積や筆跡の勢いがある作品、抽象的絵画で色彩のある作品、また、それらが融合した作品を選ぶことで、幅広い絵画表現を鑑賞できるよう選択に配慮した。さらに、アウトサイダー・アートの作品とそれ以外の作品との差異が過度に明らかにならないよう、作品選択を行なった。

6. 調査前の説明

アウトサイダー・アートの客観的な判断基準として、以下の文章を学生に提示し、解説を行なった。特に、デュビュッフェが1949年に開催した「文化的芸術よりも、生（き）の芸術を」のパンフレットからの抜粋に関して、「芸術的訓練や知識」と「創造性の源泉の自発的な表現」についてデュビュッフェの視点から生（なま、き）の芸術についての見方を解説した。

「アウトサイダー・アート（アール・ブリュット）とは

・フランス人画家・ジャン・デュビュッフェが提唱

・仏語「アール・ブリュット（ART Brut）生（なま、き）の芸術」をイギリス人著述家ロジャー・カーディナルが「アウトサイダー・アート（英：outsider art）」と英語

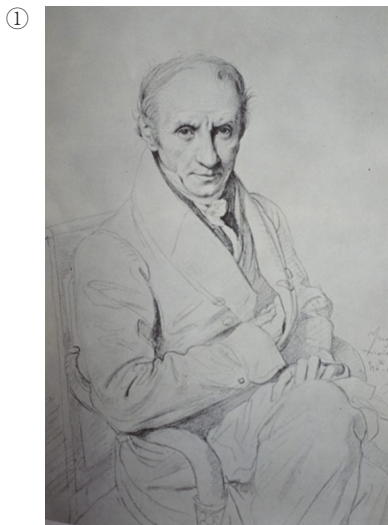
表現に訳し替えた。

- ・特に、子どもや正式な美術教育を受けず作品発表もおこなわないで独自に作品制作を続けている者などの芸術も含まれる。デュビュッフェの作品もアウトサイダー・アート（アール・ブリュット）に含まれる場合もある。」

「アール・ブリュット（生の芸術）は、芸術的訓練や芸術家として受け入れた知識に汚されていない、古典芸術や流行のパターンを借りるのでない、創造性の源泉からほとぼしる真に自発的な表現である。（デュビュッフェが1949年に開催した『文化的芸術よりも、生（き）の芸術を』のパンフレットより引用）」

7. 例示した絵画と作者

- ① ジャン・オーギュスト・ドミニク・アング



ル¹¹⁾（宮廷画家）

- ② ヘンリー・ダーガー¹²⁾（アウトサイダー・アート）

- ③ 石膏デッサン『ヘルメス像』¹³⁾

- ④ アンリ・ジュリアン・フェリックス・ルソー『眠れるジプシー女』¹⁴⁾

（アウトサイダー・アート、フランスの素朴派の画家）

- ⑤ フランシス・ベーコン『トリプティク（三幅対）, 1976』¹⁵⁾（20世紀を代表する画家）

- ⑥ Mikey Welsh¹⁶⁾

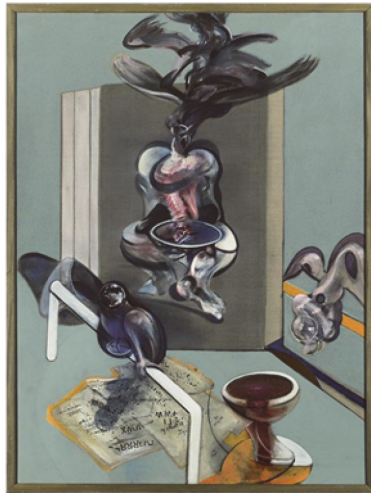
（アウトサイダー・アート、アメリカバーモント州、バーリントンを拠点に活動するアウトサイダー・アート画家であり彫刻家）

- ⑦ JJクローマー¹⁷⁾（アウトサイダー・アート）

- ⑧ 山下 清¹⁸⁾（アウトサイダー・アート）

- ⑨ ジャン・デュビュッフェ¹⁹⁾（アウトサイダー・アート提唱者）

⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



Ⅲ. 結果

1. 「アウトサイダー・アート」という言葉を知っているかどうかについて、「はい」と答えた人数は77名中3名、認知度は3.9%で

あった。

2. 「アウトサイダー・アートだと思った理由」「好きな作品とその理由」それぞれの回答より抽出したフレーズ、およびその出現度・出現パーセンテージを以下の表1に示す。

表1

Q1. アウトサイダー・アートと思う理由（回答総数 142）			Q2. 好きな理由（回答総数 155）		
フレーズ	出現度数	出現%	フレーズ	出現度数	出現%
自由	21	15	きれい	60	39
独創的・よくわからない	18	13	好き	20	13
色彩豊か	11	8	上手	8	5
変・不思議	10	7	面白い	8	5
なんとなく	10	7	リアル	6	4
感情がそのまま表れている	8	6	自由	5	3
暗い・怖い	8	6	かわいい	5	3
子どもの絵みたい	6	4	カラフル	5	3
思いつくまま描いている	6	4	もっとみたい	4	3
きれい	5	4	目を奪われる	4	3
空想的	5	4	何故か	4	3
ありえない構図	4	3	安心する	4	3
面白い	4	3	恐い	3	2
細かい	4	3	飾りたい	3	2
山下清と思った	3	2	不思議	3	2
不規則	3	2	面白い	3	2
宗教的	1	1	すごい	2	1
芸術的	1	1	素朴	2	1
誰でも書けそう	1	1	わかりやすい	2	1
斬新	1	1	感情が伝わる	2	1
純粹	1	1	気持ちがよい	1	1
生き生きしている	1	1	幻想的	1	1
リアル	1	1	夢の中のよう	1	1
見入ってしまう	1	1	芸術的	1	1
			カオス	1	1
			斬新	1	1

3. Q1・Q2それぞれの抽出フレーズのうち、出現%が二桁と高かったフレーズ「自由」「独創的・よくわからない」および「きれい」「好き」について、出現度数の差を見るため

表 2-1 「自由」の χ^2 検定

	観測度数 N	期待度数 N	残差
自由以外	121	71.0	50.0
自由	21	71.0	-50.0
合計	142		

検定統計量	
	自由
カイ 2 乗	70.423 ^a
df	1
漸近有意確率	.000

$\chi^2=70.42$, $df=1$, $p<.000$

に χ^2 検定を行った。その結果を以下の表 2-1・2-2、表 3-1・3-2 に示す。なお、これらの統計処理は、SPSS 22.0 を用いて行った。

表 2-2 「独創的・よくわからない」の χ^2 検定

	観測度数 N	期待度数 N	残差
独創的・よくわからない以外	124	71.0	53.0
独創的・よくわからない	18	71.0	-53.0
合計	142		

検定統計量	
	独創的・よくわからない
カイ 2 乗	79.127 ^a
df	1
漸近有意確率	.000

$\chi^2=79.13$, $df=1$, $p<.000$

表 3-1 「きれい」の χ^2 検定

	観測度数 N	期待度数 N	残差
きれい以外	95	77.5	17.5
きれい	60	77.5	-17.5
合計	155		

検定統計量	
	きれい
カイ 2 乗	7.903 ^a
df	1
漸近有意確率	.005

$\chi^2=8.00$, $df=1$, $p<.005$

表 3-2 「好き」の χ^2 検定

	観測度数 N	期待度数 N	残差
好き以外	135	77.5	57.5
好き	20	77.5	-57.5
合計	155		

検定統計量	
	好き
カイ 2 乗	85.323 ^a
df	1
漸近有意確率	.000

$\chi^2=85.32$, $df=1$, $p<.000$

IV. 考察

1. 「アウトサイダー・アート」を知っている学生は、調査対象者の 3.9%と認知度は非常に低く、その内容については正確に認識している者は、さらに少ないことが予想される。
2. 「アウトサイダー・アートだと思った理由」「好きな作品とその理由」について
質問紙の回答を分類した結果、「アウトサ

イダー・アートだと思った理由」としては、最も出現度が高かったのは「自由」であった。それに「独創的・よくわからない」、「色彩豊か」、「変・不思議」「なんとなく」「感情がそのまま表れている」「暗い・怖い」「子どもの絵みたい」が続いた。「好きな作品とその理由」としては、最も出現度が高かったのは「きれい」であった。それに「好き」「上手」「面白い」「リアル」「自由」「かわいい」「カラフル」が続いた。「アウトサイダー・アートだと思った理由」を問う回答には、アウ

トサイダーならこのような表現をするだろうという学生のイメージが表れることが予想され、アウトサイダーそのものに対するイメージにも近いと考えられる。つまり、保育者養成校の学生の持つアウトサイダーに対するイメージは自由奔放さ、理解しがたいオリジナリティ、色の多彩さや、感覚的な違和感や恐怖心、幼児性であることがわかる。そこには、アウトサイダーに対する自分の所属する文化的な社会からの逸脱、異質さや恐さ、幼児性、予測不能の自由さ等の共感しづらさが読み取れ、自分たちの世界＝インサイドからボーダーを引いた立ち位置より、彼らの異世界＝アウトサイドを見ていることが予測される。

一方「好きな作品とその理由」は、自身の経験や社会・文化から後天的に身に着けてきた、芸術への嗜好や価値観が表れていることが予測され、それは美しさや上手さ、なんとなく・好きだから、という理由のない直観、面白さや本物らしさ、自由や可愛さを感じ、カラフルであることが、多くの学生に共通する絵画表現の好みの理由であることがわかった。それは、当然ともいえるが自分自身の価値観、主体的な意思の表れであると同時に、「きれい」「上手」等に表れている、社会的に認められやすい完全性や整然性、そして「飾りたい」「安心する」「気持ちがいい」のフレーズが抽出されていることから、身近なもの、安心感といった同質性を好んでおり、すなわち同じ社会に所属するものとして、好きな絵画を捉えていることが読み取れる。

3. Q1の回答から抽出されたフレーズ「自由」「独創的・よくわからない」、およびQ2の回答から抽出されたフレーズ「きれい」「好き」の出現度数の有意性について

「アウトサイダー・アートだと思った理由」の回答のうち、出現%が15と一番多かったフレーズ「自由」と13と二番目に多かった「独創的・よくわからない」、および「好きな

作品とその理由」の回答のうち、出現%が39と一番多かったフレーズ「きれい」と13と二番目に多かった「好き」、それぞれのフレーズの出現度数は、表2-1・2-2、表3-1・3-2の χ^2 検定の結果より、「自由」「独創的・よくわからない」は0.1%水準で有意、「きれい」は1%水準で有意、「好き」は0.1%で有意であった。つまり、これらのフレーズの出現度数は他のフレーズの出現度数に比べて、有意に高いことが明らかになった。しかし、「好きな作品とその理由」の回答のうち、「きれい」が一番高い出現度数60を示したが、出現度数20の「好き」より有意水準は低く、保育者養成校の学生の絵画の好みは「きれい」という客観性をも含む認識ではなく「好き」という主観性の方が強いことが明らかになった。この傾向は解釈妥当性から、一般にも共通する可能性が高いと考えられる。

4. 保育者養成校の学生の「アウトサイダー・アート」の捉え方について

考察(1)(2)より、保育者養成校学生の「アウトサイダー・アート」の捉え方は、調査の冒頭で「子どももアウトサイダーである」との説明を行ったのにも関わらず、「自由」「独創的・よくわからない」といった、やや異質であり、時に「暗い・怖い」といったネガティブな他者意識が強いことが明らかになった。そして、こうした捉え方は自分の絵画の好みには反映しておらず、アウトサイダー・アートに対して「自身が楽しむ造形表現」として、高い価値を持っていないことが示唆された。さらに、保育者養成校の学生がアウトサイダー・アートを、これまで受けてきた教育や自分を取り巻く社会、文化を通して経験をもって、やや偏狭に捉えていることは、保育者として子どもの自由な表現活動を受け止める立場となった時、子どものアウトサイダーとしての表現活動を制限し、不利益となる可能性も考えられる。

V. 今後の課題

本研究より、保育者養成校の学生がアウトサイダー・アートをどのように捉えているのか、その現状の一側面が明らかにされた。子どもを保育する者は、まず子どもの心を持つことが必要となる。例えば、ダイヤモンドは研磨やカット等の加工を経て、輝きを持つ宝石としての価値をもつようになる。しかし、原石がダイヤモンドでないかといえど否である。どちらが美しいか、どちらに価値があるか、それは後付けのものである。本来どちらもそれぞれの美しさや価値を持つものであり、それはアウトサイド・アート、インサイド・アートにおいても同様である。つまり、ダイヤモンドの原石には、根源的な美や幅広い豊かさが内在しており、一方加工されたダイヤモンドには、人間の、もしくは文化的な人間社会の価値観を表現しており、他者と共有可能な、ある種の統一性を基準とした美を表現しているのだ。インサイドとそれに対するアウトサイドも同様の関係ではないだろうか。また、子どもにとって加工されたダイヤモンドと庭の石ころと、どちらの価値が高いか考えてみると、子どもの遊びや造形表現にとっては身近な石ころの方が、価値が高いとも言えよう。先述したように、子どもの表現活動においては、子どもが自らの衝動にのみよって行う活動の過程や作品を楽しむものだからである。統一性のある美しさや意図された美しさ、それは社会性とも換言できようが、それらを感じる気持ちは、人間が生得的に備えている、表現の欲求や美を求める衝動を十分に満たしてから、身に着けていくことで造形表現の両面の美しさ、すなわちアウトサイド・インサイドそれぞれの価値を認められる豊かな心をもてるのではないだろうか。

今後、保育者養成校の学生の造形表現教育において、子どもの自由で多様な表現に対して、それぞれが持つ固有の感性や表現を受け入れ、偏りなく幅広い美しさの価値を捉える視点を持たせることが、重要な課題となるだろう。

・謝辞

本研究の調査にご協力頂きました、T 短期大学および学生の皆様に心より感謝申し上げます。

・引用文献

- 1) 橋本 明, アウトサイダー・アートを巡る旅 (特集 教育 - 福祉と芸術), 生涯発達研究 6 巻, 2014 年, pp.27-34
- 2) 山田 宗寛, アウトサイダー・アートに関する研究: 美術と福祉の関係についての考察, 滋賀大学大学院教育学研究科論文集 13 巻, 2010 年, pp.55-64
- 3) 服部 正, アウトサイダー・アート, 光文社, 2003 年, pp.47-55
- 4) 東野芳明, デュビュッフェの「アール・ブリュット」館, 新潮社, 芸術新潮 19 巻 7 号, 1968 年, pp.64-67
- 5) 服部 正, アウトサイダー・アート, 光文社, 2003 年, pp.18-19
- 6) 服部 正, アウトサイダー・アート, 光文社, 2003 年, pp.18-21
- 7) タックマン モーリス・世田谷美術館 (日本語監修), パラレル・ヴィジョン, 淡交社, 1993 年, pp.9-13
- 8) 服部 正, アウトサイダー・アートと障害者自立支援法, 兵庫県立美術館研究紀要 2 巻, 兵庫県立美術館, 2008 年, pp. 14-23
- 9) タックマン モーリス・世田谷美術館 (日本語監修), パラレル・ヴィジョン, 淡交社, 1993 年, p.12
- 10) 安東 恭一郎・圖子 ひとみ, 造形活動の世界像: 現象学的還元に基づく造形表現の意味理解, 美術教育学: 美術科教育学会誌 29 号, 2008 年, pp. 23-36
- 11) <http://norabea.blog.fc2.com/blog-entry-30.html> より転載, 2014.12.6 最終アクセス
- 12) <http://japan.digitaldj-network.com/articles/9508.html> より転載, 2014.12.6 最終アクセス
- 13) S 美術研究所 H P より転載

- 14) <http://skn-g.betoku.jp/article/0292022.html>
より転載、2014.12.6 最終アクセス
- 15) <http://matome.naver.jp/odai/2133688564260969501/2137350464801341003> より転載、
2014.12.6 最終アクセス
- 16) <http://www.thesalon.jp/themagazine/art/-mikey-welsh.html> より転載、2014.12.6
- 17) <http://matome.naver.jp/odai/2137404264617068601/2137404492318166803> より転載、
2014.12.6 最終アクセス
- 18) <http://blogs.yahoo.co.jp/abbysasaki/26356016.html> より転載、2014.12.6 最終アクセス
- 19) <http://newimg.org/goodsprev.cgi?gno=p5981>
より転載、2014.12.6 最終アクセス

栗本浩二 (埼玉東萌短期大学教授)
池田幸代 (埼玉東萌短期大学講師)